

●論壇

私のエネルギーを公に

馬場博治*

Save Energy for Private Use and Divert It to Public Uses

Hiroji BABA*

半年余り、アメリカとヨーロッパの諸国で研修を受けてきた、ある市の職員が、こんな話をした。「学校、公園、町並み、道路、いずれをとっても、日本は、はるかに遅れている。都市を作ることに於いて、日本人の不器用さは驚くばかりだと思う。しかし、個々の人間の質においては、日本人は超一流だと思った」

何かにつけて、この話をよく思い出す。たとえば、都市内のある地点が再開発されている。しばらくするとそこには、立派なビルが建ち上がっている。金にあかしたという感じの、豪勢なものである。点として、そのビルはたしかに目をみはらせるものがあり、美しくもあるのだが、どこか何か、そぐわないところがある。そぐわなさは何に由来するのか。町全体の雰囲気と調和していないのである。その建物は点としての自分を主張しすぎて、周辺の面を否定してしまっている。別の言葉でいうなら、その建物は、余りに私的にすぎるのである。

日本人の生活空間は、個人を中心に、距離が遠ざかるにつれて、質的な低下を始めるとでもいえるのではないか。1人のOLがいる。身につけているのは、高価なものばかりである。数十万円もするハンドバッグ、洋服もまた20万円は下らない。住居は2DKのウサギ小屋だが、その小屋につままっている品物の数々は、いずれも最高級品ぞろいである。彼女の住居を一步出たとたんに、空間の質はたちまち下落する。一本の木もない道、ゴミだらけの道、満員の電車、職場の周辺には公園ひとつない。たまにあっても、そこで昼休みのひとときを過ごせるような所ではない。

公的空間と私的空間の分極が、極端なのである。私的空間の質ばかりを追いかけているうちに、公的空間の質は考えることも忘れてしまったのではないかとさえ思えてくる。家の庭には、ゴミなど捨てたこともない人が、駅のプラットホームでは、平気でたばこを捨てている、ツバをはく。

インドの町はきたないなどと、インド帰りの日本人はいうが、日本の町の方がはるかにきたなくて、危険なものですよと、ある人がいった。

彼はインドでサンダルを買った。日本の麻裏草履のような形で、一枚の皮の上に鼻緒がついている。インドでそれをはいて、歩き回った。軽くてはきやすいので、日本に帰ってはいしてみたが、とてもはけたものではない。危なくて、痛くて、100メートルも歩けない。日本の道には物が落ちすぎている。ガラスの破片、クギ、石コロ、でこぼこの舗装のとんがり。皮一枚の薄い草履では、とても歩ける状態ではないのである。

この話を聞いて、私はボストンの郊外、コンコードの町のことを思い出した。スーパーマーケットの入口に、裸足はいけませんというはり紙がある。聞いてみると、その町の若い人たちは、裸足で町中を歩き回るのである。つまりそれほど、道は安全なのである。

日本の交通問題にしても、行きつくところは日本人における公概念と私概念の矛盾ではないか。「私」の質を追求していくエネルギーを、どう「公」の質へふり向けていくか。市民がそれをどう自覚し、行政が、その自覚にどうかかわっていくか。今後の都市問題を解く重要なカギは、そこにあると考える。

*朝日新聞論説副主幹

Editorial Writer, Asahi Shimubun Press

原稿受理 昭和55年6月9日